

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 28 年 2 月 8 日発行

第 38 号

発行人 校長 鈴木史良

自分を見つめる素直な心

—— 一人ひとりの心の成長が見えた「作文発表会」 ——

本校の今年度最後となったオープンドアへのご参加、ありがとうございました。今学期から防犯及び意識の向上のために、授業時間中は上階のドアをロックするようにしています。オープンドア週間も例外なく実施し、学校の新たな日常の姿をご覧いただきました。多少のご不便等あったかと思いますが、ご容赦ください。各教室を訪問され、子どもたちの元気で一生懸命に学ぶ姿、この一年間で成長した姿がご覧いただけたかと思います。

オープンドア最終日である金曜日の午後、恒例の「作文発表会」を実施いたしました。全校児童生徒が図書室に集い、保護者も見守る中、一人ひとりが自分で書いた作文を読み上げたのです。スタートは小学部 1 年生から。多くの人が見守る中、正面の台の上

に立ち、しっかりと礼をしてから、大きなはっきりとした声で、作文を読み始めました。こういう時は緊張のあまり、心臓がどきどきして声が小さくなったり、早口になったりしやすいのですが、この 1 年生は違っていました。大きく、はっきりした発声で、自分の言葉を聴いているみなさんに届けていたのです。きっと何度も何度も練習してこの場を迎えたのでしょう。さすが、本校の 1 年生だなあと感心しました。

この 1 年生の発表態度を見て、他の学年の子どもたちも大いに発奮したことでしょう。

続いて 2 年生、中学年、高学年……と発表がありましたが、折り目正しく礼をし、大きくはっきりした発声での発表は、たいへんわかりやすく、一生懸命さが伝わって、聴く者の心を捉えました。また、子どもたちは自分が発表し、他の児童生徒の作文発表を聴いて終わるだけではなく、学年の発表が終わるたびに、一人ひとりの作文でよかったところなどを感想として書きました。後で発表した本人も目にするとと思いますが、頑張っているところ、よいところを認め合い、それを自信につなげられるのは本校児童生徒のすばらしいところです。

途中休憩をはさんで、6 年生、中学生の発表がおこなわれました。学校生活や学校行事などを題材にした 6 年生、自分の日常生活の中から題材を選んだ中学生、どちらも、これまでの取り組みの中で自分なりに課題を見つけ、その課題を解決していこうとする前向きな姿勢にあふれていました。ビデオ参加したタンツ・アカデミーに通う中学生の発表にも心打たれました。故郷、親元を遠く離れ、寂しさや不自由さはあるものの、バレエを学んでいこうとする彼らの心の強さを感じました。



光ることば、うならせる表現

以上のように「内容面」では、一人ひとり1年間の成長を感じさせるすばらしい作文ばかりでしたが、私は作文の「表現面」にも注目して聴いていました。子どもたちの作文を読んだり聞いたりすると、その年頃の子もだけしか書けないような表現に出くわすことがあり、そのきらっと輝く表現がさらにその作文を生き生きしたものにします。



それを私は“光ることば”とよんでいます。今回、私が見つけた“光ることば”はたくさんありますが、その中のいくつかを紹介いたします。

『本番では、天使のように足が軽くなった。』

持久走大会で頑張ったことを作文に書いた表現の中に出てきました。『天使のように足が軽くなった』実感から、空を飛ぶように走り、新記録が出せたのでしょう。

『最初のせりふのあと、心臓のドキドキは消えていた。』

学習発表会の劇の舞台での思いです。始まるまでの緊張感が伝わりますが、最初のせりふを発した後は、知らず知らずのうちに役にのめり込んでいったのです。

『緊張で足が鉄の棒のようになった。』

人前で話す時の緊張感が、うまく表現されています。人前で話すことが苦手だった彼にとって、まさに『足が鉄の棒』のように重く、動かし難かったことでしょう。

『来年の目標は、伝え合うことの質を高めること。』

よいことだからと実施しても、その質が問われます。現状を踏まえたうえで、更に質を高めることに言及した目の確かさが小学生を超えており、思わず「うーむ。」と。

中学生では、日常の朝にスポットを当てた作品がありました。目覚まし時計と格闘し、勝利を収めるも、慌ただしく身支度を整え、学校に向かう姿がテンポのいい文体で綴られ、まるで映像を見ているようなリアルで生き生きとした作品でした。会場が大爆笑のうずに包まれたことは言うまでもありません。

2月の主要予定

ホームページでの公開はしていません。ご了承ください。

